

取材日：2018年2月8日



リウマチ



北河内医療圏

より多くのリウマチ患者を 標準治療へと導くネットワークを構築。

Point of View

- ① 大学病院の膠原病内科医と整形外科リウマチ専門医が協働するとともに、地域の病院や診療所との連携を進め、ネットワーク化を図る
- ② 病診・診診連携に加えて、医療者向けの研究会や勉強会、患者教育などの啓発活動を積極的に行う
- ③ 専用紹介状を作成し、非専門医からの紹介を容易にして、より多くの患者を標準治療へと導く

関西医科大学附属病院
リウマチ・膠原病科
科長／病院教授

尾崎 吉郎先生

医療法人香川クリニック
院長

香川 英生先生

医療法人寺西内科
院長

寺西 強先生

森下整形外科・リウマチ科
院長

森下 忍先生

みやしまリウマチ整形外科クリニック
院長

宮島 茂夫先生

独立行政法人地域医療機能推進機構
星ヶ丘医療センター
整形外科部長

梶座 康夫先生

リウマチ医療の節目を迎え 連携パスを稼働させることに

我が国における関節リウマチ（以下、リウマチ）医療が節目を迎えたのは、2000年前後のこと。1999年に抗リウマチ薬メトトレキサート（以下、MTX）の保険適用が認められ、2003年には生物学的製剤が上市される。これらによって、リウマチは寛解をめざせる疾患となった。関西医科大学附属病院（旧・関西医科大学附属枚方病院）の開院は2006年、ちょうど新薬の登場によってリウマチ医療がドラスティックに変わっていく最中にあたる。同院リウマチ・膠原病科科長の尾崎先生が当時を振り返る。

「開院時からリウマチ・膠原病科では、膠原病内科医と整形外科リウマチ専門医が協力して診療にあたっています。科の立ち上げ時からチーム医療を大切に、さらに地域の診療所の先生方とも密な連携をめざしました。

地域の先生方からの紹介患者は、当初は重症例や炎症をこじらせてし

まった症例が多く、緊急入院も含めて対応していました。しかし、生物学的製剤が広まってくると、その導入や副作用への対応に迷う先生方からの治療依頼が増えてきたのです」（尾崎先生）

膠原病内科を専門とする香川クリニック院長の香川先生も、リウマチ医療の様変わりを目の当たりにした



左から尾崎先生、香川先生、寺西先生、森下先生、宮島先生、梶座先生

ひとりだ。

「2000年の開業時にはほとんどなかった生物学的製剤が使われ始め、画期的な効果が明らかになるにつれて地域の医師たちのMTXや生物学的製剤に対する興味は高まり、私が、リウマチや膠原病に関する地域の勉強会で話をする機会も多くなりました。そして新しい治療方法を知り、診療所の先生方の『患者さんにより良い治療を提供したい』という思いや『自院でできない場合は、どこに送ればいいのか』といった病診・診診連携に対するニーズが大きくなっていったのです」（香川先生）

リウマチ専門医である寺西内科院長の寺西先生が続ける。

「地域の非専門医がMTXを安全に使うためにリウマチ専門医との連携が必要だと思っていた時期に生物学的製剤が登場し、連携がよりいっそう重要だと考えるようになりました。

また、専門医であっても診療所では、緊急性のある副作用発現時にバックアップしてくれる病院がなければ、安心して新薬での治療はできませんでした」（寺西先生）

このようにして地域の医師たちに連携を望む気運が高まる中、尾崎先生が動く。

「地域の先生方から紹介いただいた患者さんに、病院で生物学的製剤を導入後、地域の先生方にお返しする連携パスを稼働させることにしたのです。もちろん、病状が思わしくな

ければ病院でフォローします。

幸い北河内医療圏にはリウマチ医療にたずさわる医師が多く、普段から紹介・逆紹介や勉強会などで面識がありましたので、地域の先生方にお声がけをしたところ、25施設（病院、診療所）から連携パス導入の賛同を得られました」（尾崎先生）

MTXや生物学的製剤を用いた安全な標準治療をめざして

「かつてのリウマチは、実に不幸な病気でした」と語るのは、みやしまりウマチ整形外科クリニック院長の宮島先生である。

「以前は主に整形外科医がリウマチを診ていたのですが、専門の医師は圧倒的に少なく、また、症状を抑える以上の有効性を持つ薬がない時代が長く続いたのです。

それがMTXを抗リウマチ薬として使用するようになって状況は一変し、最近は整形外科医、内科医の両方でリウマトロジスト（リウマチ専門医）として疾患に向き合うケースが増えてきました」（宮島先生）

森下整形外科・リウマチ科院長の森下先生は、MTXや生物学的製剤登場以前からリウマチ医療にたずさわってきた経験を持つ。

「新しい内科的治療を常に勉強し、積極的にとり入れていました。生物学的製剤導入パスが始まるときにお声がけいただき、関西医科大学附属

病院と連携するようになってからは安心して患者さんに生物学的製剤による治療をすすめられるようになりました」（森下先生）

「森下先生のように自ら学んで新しい治療に取り組む医師が増え、連携パスの患者さんが30～40例となるころには、自院で導入できる先生方が地域に広がっていった印象です。

こうして、診療所の先生方のリウマチ治療のレベルが上がってきたので、連携をしっかりとネットワーク化し、MTXや生物学的製剤を安全かつ適切に使うことが標準治療になる方法を考え始めました。そのために、参加施設をもっと増やそうと行動を起こしたのです」（尾崎先生）

それまでの勉強会や生物学的製剤導入パスにかかわった医師たちが中心となって集めてくれた地域のリウマチ医療の情報をもとに、連携に賛同してくれる施設を発掘。2016年初頭、新たな参加施設とともに『北河内リウマチネットワーク』（以下、ネットワーク）が誕生した。

リウマチ専門医等を擁する60施設をネットワーク化

ネットワークの活動は、2018年で3年目となる。

「ネットワークには、関西医科大学附属病院、星ヶ丘医療センター、野崎徳洲会病院、関西医科大学総合医療センター、結核予防会大阪病院に加えて、日本リウマチ学会のリウマチ専門医、あるいは日本整形外科学会の認定リウマチ医、日本リウマチ財団のリウマチ登録医のいずれか、または複数のそれらの資格を有する医師が所属する中小病院と診療所の約60施設に参加いただいています」（寺西先生）

「カバーするエリアは、7市からな



リウマチ専用の診療情報提供書

診療情報提供書（リウマチ専用）			
〒		担当医（科）殿	
代表電話		依頼日 平成 年 月 日	
依頼先 FAX			
御依頼者	医療機関名	返信方法 ☐ 先生へ ☐ その他（ ）	
	住所・電話番号	TEL	
	医師氏名	印 FAX 番号	
患者情報	患者氏名 別氏名	旧姓	当院の受診歴 ☐ あり・ ☐ なし
	生年月日		☐ 男 ☐ 女 M・T・S・H 年 月 日
※下記の項目は、貴院のカルテのコピーでも結構です。			
紹介目的	住所・電話番号	TEL	
	☐ 診断・合併症評価 ☐ 治療方針の相談 ☐ MTX（メトトレキサート）使用可否判断 ☐ 副作用対応 ☐ 生物学的製剤の導入前検査 ☐ 生物学的製剤の導入 ☐ 薬歴希望 ☐ その他（ ）	MTX治療時	①導入期 ☐ 紹介元で治療可 ☐ 紹介先で治療希望 ②安定期 ☐ 逆紹介可 ☐ 逆紹介不可
	※逆紹介不可の場合、MTXの投与は他院への紹介を了承するか ☐ 可 ☐ 不可		
【生物学的製剤導入後の連携形態の希望】 ☐ 導入前スクリーニング検査のみ紹介先で行い、その後は紹介元で導入を行う。 ☐ 導入のみ紹介先で行い、その後は全て紹介元で行う。 ☐ 導入後、皮下注射剤の投与は紹介元で行うが、点滴製剤は紹介先で行う。 ☐ 導入後、全ての生物学的製剤の投与は紹介元で行うが、定期検査、バックアップを紹介先で行う。 ☐ 導入後も生物学的製剤の投与は紹介先で行い、リハビリ或いは一般的な投薬は紹介元で行う。 ※軽症の場合、生物学的製剤の投与は他院への紹介を了承するか： ☐ 可 ☐ 不可 ☐ 紹介元でその後の診療はしない（紹介先からかかりつけ医として他院への紹介を了承する） 皮下注射剤で、患者理由にて自己注射困難な場合、紹介元での通院注射が可能か否か ☐ 可能 ☐ 不可能			
提供	診療経過 現在の処方 備考		

る北河内医療圏を中心に、東は京都府の一部、西は大阪市内の一部も含みます。このエリアの人口は120万人弱とされており、罹患率から推計して9,000名程度のリウマチ患者がいると思われます。もちろんエリア外の医療機関に受診する患者さんもいるので、実質7,500～8,000名程度の患者さんを当ネットワークの対象と考えています」（尾崎先生）

ネットワークでは定期的に、どの程度の患者がネットワーク参加施設を受診し、標準治療を受けているのか、調査をしているそうだ。「現在、約2,500名、つまりカバーエリアの患者さんの1／3ほどが、適

切な専門的治療を受けているのは確かです」（尾崎先生）

当然、残りの2／3のすべての患者が標準レベルに達していない治療を受けているわけではないだろう。それでも中には「リウマチが不幸な病気」だった時代にとどまり、いまだに最新の標準治療を受けられずにいる患者もいる。星ヶ丘医療センター整形外科部長の棚座先生が話す。「当院ではリウマチに対して、ごく普通に最新の薬物療法や手術を行っており、診断から継続的な治療まで院内で完結できます。

ネットワーク参加当初は目標のひとつである『地域全体のリウマチ医

療を高いレベルで均一化していく』ということが、あまりピンときませんでした。けれどもネットワークに参加して3年の間に、適切な薬物療法を受けていない方、手術が必要になるまでに悪化して当院を受診される方、要するに標準治療を受けていない患者さんに出会う機会が少なからずありました。そこで、次第にネットワークの必要性を実感するようになりました」（棚座先生）

研究会や勉強会を通して
相談し合える関係ができた

ネットワークでは、今の2倍の約5,000名程度を専門的な治療の場へ、標準治療の道へと導くことが当面の目標だという。達成に向けた活動の柱は大きく3つ。連携の強化と、市民教育、医師教育である。「教育に関しては、患者さん向けの『リウマチ市民公開講座』を年1回、医師向けには『北河内リウマチ膠原病勉強会』、『大阪京阪生物学的製剤を学ぶ会』、『リウマチ症例相談会』をそれぞれ年2回ずつ開催しています」（尾崎先生）

医師向けの勉強会や研究会は、非専門の医師から研修医にいたるまでオープンな学びの場として提供されることで、連携の強化にもつながっているようだ。「ネットワーク参加施設の医師同士が、勉強会や研究会で頻りに顔を合わせ、関係を深められるのは良いことです。治療にちょっと迷ったとき、知り合いになった先生にメールで、場合によっては画像も添付し、相談してアドバイスをいただける。私は、尾崎先生などのリウマチ・膠原病科の先生方に相談に乗ってもらい、自院で解決できる症例が増えたと感じています」（森下先生）

梶座先生も現在のネットワーク活動の良さを語る。

「定期的な市民公開講座は、私たちから患者さんへの広報、啓発の場にとどまらず、患者さんからのフィードバックを得られる貴重な機会にもなっています。また、リウマチ以外の、たとえば膠原病などの類縁疾患に関しても、関西医科大学附属病院にスムーズに紹介できるようになりました。リウマチ専門医同士がお互いに患者さんを紹介し合い、治療方法について相談し合い、研鑽し合えるのもネットワークのおかげです」(梶座先生)

診診連携のさらなる充実や 多職種連携の推進が課題に

ネットワークは今、全国的に見てもモデルケースとなる活動を展開しているように思われる。

「全国に目を向ければ、地域ごとに違う問題を抱えており、めざす連携のかたちもいろいろだと思います。当ネットワークがカバーする地域はもともと、リウマチを診る医師も医療機関の数も多いほうで、交通の便も良い恵まれた環境にあります。そうした都市型のリウマチ医療連携として見れば、理想のかたちに近づきつつあると言えるかもしれません」(尾崎先生)

「活気ある連携のモデルになるにはネットワークの連携や活動に加え、地域の診療所の非専門の先生方に対しても、リウマチ医療の情報やネットワークで提供している標準治療の重要性が広く浸透するようなアクションが必要ですね」(香川先生)

非専門の医師たちにも連携の輪に入ってもらうための構想はすでにあるようだ。

「病診連携よりも診診連携のほうが

難しい面があるのかもしれませんが。ですから、ネットワークに参加していない非専門の先生方の診療所と、ネットワークに参加している診療所の先生方とが、紹介・逆紹介の関係をつくりにくい場合には、まずネットワークの基幹病院に紹介していただき、診療所につなぐ、つまり基幹病院が仲立ちするような仕組みがあってもいいのではないかと考えています。

そこから先、ネットワークの診療所から最初の非専門の先生にお返しするかどうかは患者さんの状態にもよりますが、非専門診療所のご希望に添いたいと思っています。そのために最初の紹介の段階で、自院で診療されるか、専門医に任せたいか、明記をしていただける専用の紹介状(【資料】)を作成しました。こうしたツールも使い、連携の輪をさらに広げていくよう努めていきます」(尾崎先生)

「ほかに力を入れるべきは、在宅医療まで見据えた多職種連携でしょうか。リウマチは、医師に看護師や薬剤師をはじめとする医療スタッフたちが加わったチームで患者さんを診ていく必要があるので、人材育成が大切です。たとえば日本リウマチ財団の登録リウマチケア看護師の資格取得なども考えた医療スタッフ向けの勉強会などを、これからも積極的に開催していくつもりです」(香川先生)

「医療スタッフの人材育成も含めて『すべては、患者さんのために』です。それを忘れずにネットワークの活動をさらに活性化させたいと思います」(宮島先生)

最後に、10年以上にわたって地域のリウマチ医療連携を牽引してきた尾崎先生が、ネットワークに参加する施設の医師たちを代表して語って

くれた。

「MTXや生物学的製剤を安全かつ適切に使い、安定したコントロールを得て、ごく普通の日常生活を送ることができる患者さんがひとりでも増えるように、今後も医療従事者同士が手を取り合っていきましょう。

私たちは地域に向け、これからもその思いを発信し続けます」(尾崎先生)

関西医科大学附属病院

〒573-1191
大阪府枚方市新町2-3-1
TEL: 072-804-0101

医療法人香川クリニック

〒572-0836
大阪府寝屋川市木田町4-5
TEL: 072-880-5522

医療法人寺西内科

〒571-0046
大阪府門真市本町30-15
TEL: 06-6907-6665

森下整形外科・リウマチ科

〒573-0126
大阪府枚方市津田西町3-30-1
TEL: 072-808-0151

みやしまりウマチ整形外科クリニック

〒573-0064
大阪府枚方市北中振3-23-15
TEL: 072-837-3100

独立行政法人地域医療機能推進機構 星ヶ丘医療センター

〒573-8511
大阪府枚方市星ヶ丘4-8-1
TEL: 072-840-2641